少し個性的だった母とのつらかった日々と柴本先生のお講義

長谷川尚見
地域包括支援センター　社会福祉士・精神保健福祉士

柴本先生のお話をお聴きしながら、自身が育った家庭環境を振り返り、子ども時代に越えられなかった当時の現実から、何度も抜け出そうと試みた自分を振り返る機会をいただきました。

同居していました祖母に、様々な生活の知恵を教えてもらったので、少し個性的だった母の言葉に大きくは惑わされず、自分の生活の中で状況判断する能力は少しずつ育てていただきました。

思い通りにいかないと暴言や暴力が出てしまい、時には泣き叫ぶ母について、明確に自分が判断できるようになったのは、成人してからの事でした。気性が荒い母でしたが、スポーツ万能で、テニス等の活動を通し友人はいましたので、学生時代は、「母のようなタイプの人もいるから」と思う部分がございました。

子どもの頃の自分は「母は私のことは気にくわないのかもしれないな」と思っていましたが、祖母や親戚に、「（母のことを）かまわないこと。（母が）変わっているから」と言われていたため、自分の居場所がある祖母や親戚との関わりを自分の生活の軸として考えながら過ごすようにしていました。

仕事で忙しかった父については、父の母である祖母と母との折り合いが悪いだけだと思っていたことが、今思うと一つの要因であったかもしれません。母が周囲に対する文句を父に訴えると、父は母の機嫌をとることが少しずつ増え、自分が思春期に入る頃には、母が事実確認していない話や母一人で考えた思いを父に伝えても、その話によって周囲が父から攻撃を受ける事が多くなっていきました。

　母の症状は高次脳機能障害とは違いますが、母は、二つのことを同時に進める事は得意ではありませんでした。また、相手の気持ちを汲むことは苦手でしたので、母と一緒に行動していると、相手側が感じている不快な気持ちを、一緒にいる自分も受けてしまうことがございました。

　そのような子供時代の家庭環境で、父の転勤が絡み、学校生活にも支障がでるような出来事があり、高校進学の時から暫くの間、自分の将来を考えて生活を築くことができなくなった時期がございました。

大人になってから、柴本先生のお話にもございました「介護者の権利章典」にございますような幾つかの言葉に出逢い、自分を大切にすることや他人に助けを求めること、母の心身が健全であれば送っていたはずの自分自身の生活を守っていくことについて自分が意識し学ぶ機会を得ていきました。

実は、最初にこうした言葉に出逢った時には「まさか。私の育った環境はそんなにおかしいのかな。」と感じるだけで、自分の状況理解はできませんでした。自分が感じている自分の気持ちをある程度掴めるようになるまで少し時間はかかりましたが、その後、社会福祉士、精神保健福祉士として様々なケースに出逢いながら、より自分の状況理解を深める機会をいただいている事を感じております。

自分の住む北海道でもようやく『ヤングケアラー』に対する支援体制を整える方向で動きだしたようです。それぞれの状況は違いましても、かつて『ヤングケアラー』だった方や、現在家族介護者である多くの方々と当事者の支援に、自分に可能な役割の中で、ほんの少しでも協力していけるよう引き続き必要な学びを続けたいと思います。

柴本先生のお話にもございましたが、様々な状況から大変残念なことに、命を落とされる方もいらっしゃいます。
柴本先生は、お母さまの言葉で救われたお話をされていましたが、自分も、かつて父の母である祖母や父の兄である伯父の言葉が大きな支えとなり、自分の貴重な人生を未来に繋いできていたことを改めて感じております。

これからも、必要な繋がりを、より温かく、より適切に繋いでいく為に学び、深めていきたいと思います。
今後とも、ご指導くださいますよう何卒宜しくお願い申し上げます。